

ソウル日本人学校 帰国報告

札幌市立札幌中学校

教諭 井上 博文

I 韓国及びソウルの概要

1 韓国の歴史

① 三国時代（～A D 6 7 6 年）

B . C . 2 3 3 3 年，壇君王儉が古朝鮮を建国した後，中国東北部から韓半島にかけて多くの部族国家が建国されました。

しかしB . C . 1 世紀頃には，高句麗・百済・新羅の3国に統合されました。特に百済は仏教，稲作，建築技術，漢字，美術，音楽などの飛鳥時代の文化の基礎を日本に伝えました。



② 統一新羅時代（6 7 6 ～ 9 3 5 年）

唐の協力を得て新羅は他の二国（百済，高句麗）を滅ぼし統一を果たします。このとき日本の大和朝廷は百済に援軍を出し，唐・新羅の連合軍と戦い敗れます（白村江の戦い）。その後，日本は北の渤海との交流をはかりつつ，統一新羅とも使節の行き来をさせました。7 5 2 年の奈良東大寺の大仏の開眼会には新羅の僧を招いています。黄金期を迎えた新羅の仏教文化は飛鳥・天平時代の文化に影響を与えました。その後，新羅は権力争いで衰退し，高麗に併合されました（9 3 5 年）。

③ 高麗時代（9 3 5 ～ 1 3 9 2 年）

仏教文化をさらに発達させた高麗は，高麗青磁や八万大蔵経などで有名です。グーテンベルクよりも2 0 0 年早く，金属活字を発明，使用しています。しかし，1 2 3 1 年，蒙古族に高麗を制覇され，苦難の時代を迎えます。高麗人たちは蒙古に徴兵され，日本へ侵攻（1 2 7 4，1 2 8 1 年の元寇）させられました。その後，高麗末期には倭寇襲来に頭を悩ませ，足利義詮と倭寇取り締まりの約束をし，その後1 6 0 年あまり使節の行き来は続けられました。

④ 朝鮮王朝時代（1 3 9 2 ～ 1 9 1 0 年）



仏教を排し，儒教が国教となり，年長者を敬う態度や礼儀，男性中心の家族制度など現在なお残存する韓国の風土を形成しました。

1 5 9 2 ～ 9 8 年，豊臣秀吉による文禄（壬辰倭乱）．慶長の役（了西再乱）では，いたるところを焦土にされました。日本軍が全土を侵略したかに見えましたが，各地で農民，僧侶などの義兵の激しい抵抗にあい，李舜臣將軍の率いる水軍により，ことごとく打ち破られ補給が途絶えてしまい戦力が落ち退くこととなります。壬辰倭乱を「陶磁器の戦争」と呼ぶ人もいます。高い技術の朝鮮陶磁を手に入れようと，多くの陶工たちを拉致し陶磁器をつくらせました。

彼らは後に有田焼をはじめとする日本各地の有名な焼き物の祖となりました。この戦いで朝鮮王国の軍民5 0 万人，明軍1 0 万人，日本軍2 0 万人近い死傷者を出しました。その後，清の攻撃に社会は混乱し衰弱しました。

しかし，日本とは徳川幕府成立後，善隣友好のよしみを通じることになり，1 6 0 7 年に始まった朝鮮通信使の日本派遣は，1 8 1 1 年までの2 0 0 年間，1 2 回にわたって毎回5 0 0 人前後の大規模な文化交流使節団でした。一行の中には当時の朝鮮の最高級の学者，医者，画家，文化人等が含まれ鎖国時代の日本に与えた文化的影響は非常に大きいものがありました。1 9 世紀後半には，鎖国状態を続けていた朝鮮半島にヨーロッパの強国や日本が攻め入り開国を求めました。1 8 7 5 年，日本は江華島で事件を引き起こし，翌年，日朝修好条規を締結し強制的に開国させました。1 9 1 0 年の日韓併合で，この時代にピリオドが打たれました。

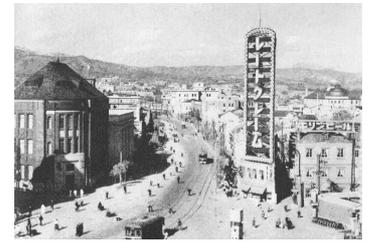


⑤ 近代～現代

36年間、朝鮮領土は日本の植民地（日帝時代）になりました。その間、各地で抗日義兵闘争、伊藤博文暗殺などが起こりました。大規模な抗日運動としては、1919年の3・1運動で、200万人の韓国人がデモに参加しました。1931年の満州事変以後、朝鮮半島は日本の駐留基地となり、一層の圧力がかけられました。韓国人を完全に「皇国臣民」にしようとする政策が展開され、神社参拝や「皇国臣民ノ誓詞」の斉唱が強制されました。さらに、言葉を取り上げ（韓国語禁止）、名前を取り上げ（創氏改名）、自史を取り上げた政策は



1945年の解放まで続きました。また、日本の労働力不足を補うために、韓国人の強制連行も行われました。彼らは過酷な労働を日本本土やシベリアで強いられました。農民からの土地収奪や強制連行の結果、日本本土の韓国人は200万人以上にも達しました。さらには、従軍慰



安婦に強要された女性もいました。

第2次世界大戦後国権を回復したものの、1948年、分断状態のまま大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国の両国が誕生しました。その2年後、火ぶたを切った朝鮮動乱（韓国戦争）は、アメリカ・ソ連・中国を巻き込んだ東西対立の戦争でもありましたが、同時に両国にとっては親兄弟との別離を強いられた、悲劇の戦いでもありました。1953年休戦協定が結ばれ、現在に至っています。

1988年にはソウルオリンピックが開催され、その後、韓国の工業化は日本に追い付け追い越せの勢い（「漢江の奇跡」）です。1991年には国連への南北同時加盟を実現させ、札幌ユニバーシアード冬季大会開会式では、初めて南北の統一旗が振られました。また、2000年には、初の南北両首脳の会談が行われ、離散家族の再会など明るい方向に進んでいます。分断された国家の統一は民族共通の悲願として、今なお果たされていません。2002年にはサッカーワールドカップが日本と共催でおこなわれました。



日本とは、1965年日韓基本条約が締結され国交が回復し、日韓両国の首脳会談も定期的に行われ、文化交流なども進んできました。1998年の金大中大統領と小渕恵三総理大臣（当時）との日韓首脳会談、共同声明を経て、経済交流や文化交流が一層進展しました。2005年には、「日韓友情年」として文化、スポーツ、芸術等さまざまな交流行事も開催され、今に至っています。

2 ソウルの気候

春秋が短く、冬が長いのが特徴です。4月春の訪れとともに一斉に花開き、緑が濃くなり始めるとたちどころに初夏（6月頃）の気配、そのまま夏へと移行します。7月下旬になると雨季が終わり、盛夏となります。日中の気温は30度を越し、寝苦しいほどの暑さが2・3週間続きます。9月には秋の気配に変わり、年によっては長雨になったり、台風がやってきたりすることもあります。



10月になると朝晩の冷え込みが強くなり始めます。10月中旬になると、アパートでは朝晩は暖房（オンドル）が入るようになります。暖房はとても暖かく、他の特別な暖房器具は必要ありません。乾燥しすぎるため、加湿器などの準備が必要です。

11月ともなると街行く人々の服装は冬の装いに変わり、3月までの長い冬を迎えることになります。冬の冷え込みは厳しく、厳冬期には-15℃以下になることもあり、漢江（ハンガン）が凍る年もあります。

<各月平均気温>

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
東京	14.4	18.7	21.8	25.4	27.1	23.5	18.2	13.0	8.4	5.8	6.1	8.9

ソウル	12.1	17.4	21.8	24.9	25.4	20.8	14.4	6.9	0.2	-2.6	-0.3	5.2
-----	------	------	------	------	------	------	------	-----	-----	------	------	-----

3 ソウルの治安状況

金泳三大統領時代、風紀の見直しが急速に進められ、モラルや治安については現在の日本に比べ「良い」状態であるといえます。1993年7月からは道路に唾を吐いたり、ごみ・吸い殻を捨てたりすると反則金が課せられるという法律が施行されたのもその一例です。繁華街には夜遅くまで人出（女性や子ども連れも含め）も多く、快適に暮らすことができます。

しかし、不況による犯罪も増えています。置き引き、スリ、強盗、誘拐、殺人などの犯罪に対しては気を緩めずに注意する必要があります。

また普段の生活ではほとんど感じませんが、心の奥では反日感情を持っている人は少なくないと思われます。「日帝時代」や日本に侵略された歴史は韓国の教科書にのっており韓国人はそれを学習してきています。従って、誰に対しても紳士・淑女的に接すること、必要以上に日本語で騒がないこと等は、我々日本人の絶対的なマナーといえます。歴史の経緯から心の奥には反日感情を持つ人ももちろんいるので、韓国に居留する日本人として「節度ある」行動が求められます。

ただいくつかの懸案はあるものの、日本文化開放など対日感情は好転してきました。現在は日常生活や学校の教育活動において支障になることはあまりありません。

近年においても竹島（独島）領有問題や従軍慰安婦問題、教科書問題、靖国問題、漁業権問題、日本海問題などが取り上げられましたが、W杯共同開催や日韓国民交流年を通して両国の関係はより良い関係に向かっているといえます。時折各種団体のデモがありますが、日常生活そのものにはあまり影響がありません。



また現在「休戦状態」にある国なので、月に1度（15日の午後）「国民防衛訓練＝民防（みんな）」といって、軍事的非常事態への訓練の日があります。以前は走行中の車は右端によって停車し、外にいる人は地下や建物内に入らなければならないという訓練でしたが、現在は形式的になりつつあります。訓練は30分ほどで終了しますが、日本人学校での生活には影響はありません。

4 韓国の文化



東北アジア一帯と韓半島地域に定住していた古代の原住民の間には、深い類縁関係があると文化人類学者は考えており、その根拠として日本列島と韓半島で出土する土器の形、文様などの類似性があります。

しかし、はるかな太古の昔はともかく、古代朝鮮と三韓・三国時代を経て、統一新羅時代からさらに高麗時代には日本や中国などとは明らかに違う独自の文化をつちかしてきました。それは、衣、食、住などの日常生活だけでなく詩歌と絵画・彫刻をはじめ音楽と舞踊など芸術の分野においても日本、中国とは違うユニークさを示しています。ほかにも青磁・白磁の陶磁器、太鼓や琴などを使っての民俗舞踊などの伝統芸能、豊かな食材を用いた韓国料理など多種多様な文化があります。



5 韓国の経済

この40年の間、特に1962年に最初の5か年計画を立てて、本格的な経済開発に乗り出して以来、韓国の経済発展は世界の中でも類のない目覚ましい発展を遂げました。1996年にはOECD（経済協力開発機構）に加盟して、先進国にあと一息という段階まで至りました。国民一人あたりのGNPは1996年末に10,000ドルに達しました。「漢江の奇跡」と称えられたこのような経済成長を遂げた背景には、政府主導の財界への支援、輸出中心の経済戦略、ハイテクに重点をおく産業政策、教育水準が高い労働力に恵まれていたことです。

しかしこの目覚ましい成長も、1997年7月のアジア金融危機において、いくつかの財閥と

金融機関が苦境に直面し、12月にはIMF（国際通貨基金）の管理下に入りました。経済安定と回復に努めた結果、2005年8月末にIMF支援融資の全てを償還することができました。

しかし、アメリカのサブプライムローン破綻に端を発する不景気は韓国経済を直撃し、現在株価は史上最低を記録するなど、これからの韓国は、世界経済の動きと合わせ韓国政府の構造改革、財閥依存体質の改善など新しい経済運営を迫られています。今年の経済動向としては為替要因等により、回復基調にあると言われています。

6 韓国の言語

「百科事典」

国語は韓国語。文字は表音文字のハングル（とごくまれに漢字）を使っています。ハングルとは「大いなる文字」という意味です。朝鮮時代に第4代世宗が、それまで使用していた漢字は複雑なため、誰にでも使えるような文字をと考え、公布したのがハングル文字です。10の母音と複合母音11と、14の子音、5の複子音を組み合わせで表記、発音します。基本的な語順は日本語と同じです。

백과사전

7 韓国の宗教

国教はなく信仰の自由が保障されています。仏教50%、キリスト教45%、儒教は2%にも満たないようです。しかし、儒教の教えは現在の社会でも年長者を敬う姿勢や祭りごとなどの中に生き続けています。

一般生活の中ではキリスト教信者の敬虔さが目立つようです。教会がソウルの至るところにあり、毎週日曜日になるとミサに訪れる信者であふれます。

若い世代では、韓国も日本と同じように儒教の教えが薄れつつあり、少し寂しい感じではありますが、目上の人に礼儀を尽くす姿勢などはまだまだ日本より残っていて、いい意味で「古き良き」日本が残っているようで懐かしさがあります。



II ソウル日本人学校の概要

ソウル日本人学校は、「小学校、中学校の課程と同等の課程を有する在外教育施設」として文部科学省より認定されています。また、在韓日本国大使館と韓国政府の間で正式文書が取り交わされ、韓国文教部・外務部より私立各種学校として認可されています。幼稚部・小学部・中学部の三部からなり、児童・生徒の大部分は、商社・銀行・報道機関・大使館等勤務者の子女です。児童・生徒は市内各地域から通学しており、スクールバスを利用している子も数多くいます。教職員は、政府派遣教員と学校運営委員会が採用した現地採用教職員とで、構成されています。



教育課程は、文部科学省の学習指導要領を基準としていますが、海外校の特色を加味するために、小中学部では週1時間の韓国語の時間を、小学部3～6年生では週2時間の英会話の授業を特設しています。

学校運営委員会は、日本人会理事会において1970年10月に設置された学校設立準備委員会が1972年4月に発展的に解消をすると同時に発足し、現在に至っています。

開校当時は龍山区漢南洞の貸ビルの旧校舎で授業を行っていましたが、1980年に開浦洞校舎、2010年現在地（麻浦区DMC地区）に校地を取得して校舎（5階建て鉄筋コンクリート）が建設されました。以上のような施設設備の完備に伴い、日本国内の学校とほとんど同等の教育活動を行なうことができるようになっています。

- 学 校 名 ソウル日本人学校 [Japanese School in Seoul]
- 設 立 昭和47年5月8日 (1972. 5. 8)
- 設 置 者 SJC (Seoul Japan Club・旧ソウル日本人会)
- 運営主体 ソウル日本人学校運営委員会
- 韓国での法的地位 私立各種学校
- 所 在 地 ソウル特別市麻浦区上岩洞 1 5 8 2



Ⅲ ソウル日本人学校に赴任して ～手記～

一、歴史の「ど真ん中」に来て

私は、正直言うと、ずっと迷っていた。

「どのように戦争について伝えたいのだろう。」

「どのように韓国・朝鮮について子どもたちに伝えたいのだろう。」

それは、社会科教師として、そして曲がりなりにも歴史を専攻したものにとって、恐らく失格だ。

うまく自分の中で消化しきれないまま、教えていた。

もちろん、本も読んだ。ネットもずいぶん見させてもらった。

主張はある。戦争は絶対反対。平和が大切。

当たり前だ。

そこは子どもたちにも懸命に伝えてきた。

でも、見れば見るほど、正直分からなくなることがあった。

どんな人でもブレないはずの、戦争反対と平和。

しかし、こと朝鮮半島の歴史になると、日本人は変わってしまうように思った。

戦争反対・平和を目指す人であれば、植民地支配を肯定する人は恐らくいないだろう。ましてや、世界唯一の被爆国の人間であればなおさらだ。

でも、現実が違う。

「誰が言っているのが、本当なんだ？」

今考えると、その時点で受け身だった。

他人の意見にばかり目がいて、自分の主体的な意見が、あるようでなかったのかもしれない。

そうして2007年暮れ、ソウル日本人学校赴任が決まった。

実を言うと、「旅行でもあまり行けないくらい、遠くの学校を経験したいなあ」などと、馬鹿で安易なことを思っていた。

そんな私に、神様が「しっかり勉強してこい」と言っているかのような感覚があった。

早速、転機があった。

ソウル日本人学校での初年度、中2の担任をさせていただいた。

ここでは中2の校外学習は、あの有名な独立記念館だ。

独立記念館は、韓国の国の成り立ちを年代を追って再現した博物館だが、ほぼ半分は日帝時代（日本の植民地だった時代）の反日運動についてのものだ。そして、光復節（8月15日の終戦記念日）などの国家行事の会場でもある、韓国のいわば、反日のメッカともいえる場所だ。

赴任してすぐの2008年5月、下見を兼ねて初めて目の当たりにした。

独立記念館には、入館者が落書きをしていいコーナーがある。

当時、全くと言っていいほど韓国語が分からなかった私ですら、ハッキリと分かる。

それは、怒りに満ちた落書き。

あの落書きを目の当たりにしたことが、「もっとこの国のことを勉強しなければ」との思いに駆り立てられた、原点だった。

2008年、今度は中1の担任になった。

校外学習は「歴史に関わるソウルめぐり」。

他の中学部の先生の協力を得、メインの見学場所を西大門刑務所歴史館に変更した。

日帝（植民地）時代多くの政治犯が投獄された場所だ。

アジアのジャンヌ・ダルクといわれた、三・一独立運動で有名な柳寛順（ユ・ガンスン）も、ここで獄死した。

彼女の墓や記念館には、中2の上記の校外学習の帰りに立ち寄っていた。

大人なら子どもに見せるのを躊躇しかねない場所だ。

しかし「本当」「本物」を見て学んでほしい、と強い思いがあり、中学部の先生方の理解を得て、中1の校外学習の柱をここの見学にした。

そこにシン・ピルスンさんという、日本人学校の子どもたちについていただいた、日本語ガイドボランティアの方がいた。

穏やかなほほえみが特徴の、初老の女性だ。

校外学習の打合せにうかがった時の、その方のお話が今でも鮮明に心に残っている。ほほえみに似つかわしくない、とても強い、口調だった。

「ひどい仕打ちをした日本を責めるのではなく、互いに事実を知り、二度とこのような暴力を繰り返してはならないと悟ることが大切です。

悲しい戦争の歴史を学ぶことで、私たちは人間の内にある残酷さを知るのです。そして、何人であろうとも人種が違えども、互いを尊重し、成長しあうことをしていかないと平和は訪れないのです。」

同じ年の5月には、修学旅行の下見として、慶州市のナザレ園を訪問する機会を得た。

恥ずかしながら、私はソウルに来る前、どのような施設がよく知らなかった。

終戦当時、朝鮮人と結婚した日本人女性の何人かは朝鮮に残ることを選択した。しかし、解放を迎えた朝鮮で日本人を妻にしていることが社会的重荷となって日本人妻を捨てたり、妾として迎えられた日本人妻がその処遇に耐えられなくなって家を出たり、または1950年に勃発する朝鮮戦争で夫と行き分かれるなどによって、独り身になったまま生活する日本人女性が日本に帰国できないまま取り残された。

慶州ナザレ園はそうした日本人妻を援助するために設立されたものである。

愛国心とか民族とか、そうした障壁を乗り越えた「日韓の架け橋」が現実存在して見ることができる場所だ。

訪れてお会いした、ソン・ミホ園長先生のおっしゃることが、私には掛け値なしにすごい、と思えた。

「設立者のキム・ヨンソン先生は戦争でお父様を日本の憲兵に殺されたにも関わらず、韓国で行き場をなくし生活ができない日本人妻や病気のおばあさんたちを、自費でお世話していました。周囲の無理解や冷たい視線を浴びながらも、です。おばあさんたちには何の罪もないのですから。」

その事業を受け継いでいらっしゃるソン・ミホ先生が、なにより素晴らしいと感じた。

聞けば、最初ソン・ミホ先生は短期のボランティアから始まったらしい。

しかし、キム・ヨンソン先生の生き方に感銘された後、園を去らずに生涯を捧げる決意をされた。

そしてキム先生亡き後は、自らが園長となり、今なおナザレ園を運営されている。

その生き様は、本物だ。

教師ならば、必ず子どもたちに教えているはずだ。

「真面目」「本気」「素直」「一生懸命」に生きようと。ソン先生は、実践されていた。

「人生の中で出会った素晴らしい人々のように、自らもなりたい。」

ただ「いいな。」で終わらせるのではなく、主体的にその世界に関わっていく生き方を、身をもって実践していく。

ナザレ園を訪れた人々は皆思うはずだ。「何か自分にもできないだろうか。」

教師は子どもたちに伝えていることを、「自ら実践したい、しなければ」と感じる。

私は、特にここ韓国でその思いが強くなったように感じた。

韓国には、日本人がそう思える機会や場所がたくさんあるすぎるのだ。

人間として、「本物」でありたい。

子どもたちを教育するとき、自らが生き方モデルになれるように。

これだけ情報が氾濫している時代では、知識や口先だけではなかなか子どもたちは動かない。

自らが背中を見せて、手本とならねばならない時代が本当にやってきている。

なんて素晴らしい国に赴任することができたんだろう。

主体的に「この国のことをもっと勉強したい。」そして「韓国と日本の架け橋に自らなりたい」と思えるようになってきた。

そして、自分が関わるソウル日本人学校中学部の子どもたちに、ここに住んでいること自体が「架け橋」であり、歴史に関わり、歴史を変えることができるかもしれないのだ、と強く伝えたいと思うようになった。

赴任して一年少々が立っていた。

二、一枚の絵、そして出会い

二年目、研究授業の機会があった。

中1の総合学習での、ボランティア分野の導入としての授業だった。

二年目になり、何とか子どもたちにとって身近なもののイコール韓国を題材に、「自分で教材をつくりたい。」と考えていたところだった。

「何を題材にしよう。」と思っていたところに、日本人学校国際交流ディレクターの深野正一先生より、貴重なアドバイスをいただいた。

「李方子という方が描いた絵ですよ。いかかですか。」

日本人学校職員室前に飾られていた一枚の絵。「晩秋」と銘打たれた柿の木の絵だった。

「確か、テレビでやっていたな…。」私はその程度の知識であった。

全く以て、社会科教師とはいえないほど、ひどい。しかし、直感で「これだ。」と思った。

今思えば、それが始まりだった。

ここまで深く関わるとは、正直自分も当時は思っていなかった。

決まれば、その後は早かった。

まず決定的な知識のなさを埋めるべく、本を取り寄せ、ネットで手当たり次第検索した。そして、思った。

「今自分は韓国に、ソウルにいるのだ。直に見れるところは必ず見よう、現場で雰囲気を感じよう。」

そうすることで、授業で臨場感を生み出せる。

李方子妃が住んでいらしゃった昌徳宮樂善齋、李王家の博物館である景福宮故宮博物館、韓半島の歴史すべてを再確認できる国立中央博物館。

すべて自宅から30分圏内にある(!)ことを感謝した。

きっと人生でこのようなところに住むことは二度とないだろう。

そうこうしているうちに、耳寄りな情報をいただいた。

「李方子妃の右腕だった方が、SJC（ソウルジャパンクラブ）で以前講演をされたらしいですよ。」

すぐ連絡先を確認し、会っていただけるようお願いした。

それがキム・スイム先生だった。

気がつけば、その日の晩、京義線（ソウルから北朝鮮との国境線まで続く韓国の国鉄）に飛び乗っていた。

キム・スイム先生のお宅は、韓国と北朝鮮との国境線に最も近い都市の一つ、坡州（パジュ）市汝山（ムンサン）にある。

坡州市は、板門店のある軍事境界線（38度線）を隔てて北朝鮮と接する都市で、市域に非武装地帯がある唯一の市である。

京義線の電車で揺られながら、思っていた。

学校で勤務を終えた後に、日帰りで北朝鮮との国境に来ることができる。「社会科教師として、こんな贅沢なことがあっていいのだろうか。」

さて、キム・スイム先生。

汝山駅から、タクシーで10分もしないところに先生のお宅があった。新興住宅街のアパート群の中の一棟だ。

実は、正直に言うと、私は困っていた。どのようにお話をすればいいのか、思いあぐねていた。というのも、先生のお年を聞いたからだ。御年90歳。

そのお年の方とお話をしたことがない。しかし、お会いして、心配はすべて杞憂に終わった。

先生がよくおっしゃるのだが、「人を年齢で決めつけるものではない。」

まず、そのよどみない日本語。

しかも、私よりずっと回転が速い（先生、比較してすみません）！

そして、その情の熱さ。

韓国には「恨」という感情の概念がある。「恨」とは、日本人が思う「うらみ」と同義ではない。

「積もり積もった情念と、それを何とか晴らしたいという切なる願い」（野村進『コリアン世界の旅』）なのだ。

キム先生の李方子妃にける思いのすごさ、激しさに圧倒された。それはまさしく「恨」そのものだった。

激しい口調で私に話された。

「今、日本、韓国双方の人々が、李方子妃の業績を忘れてる。日本と韓国の歴史の狭間に立たされ、いわば戦争のもっとも犠牲になった方なのに。元皇族にも関わらず、日本の宮内庁をはじめ関係者たちは今何をしているのか。韓国でも、「福祉の母」といわれるほど社会貢献をしたのに、顕彰されていないのはどうしてなのか。彼女が創設したはずの福祉社団法人慈行会、慈恵学校（水原市）の人たちも、方子妃殿下をもっと大切にすべきだ。」

その激しさに圧倒され、先生のお宅を出たのは夜の11時を回っていた。初対面、2009年10月26日のことである。

三、歴史に「関わる」意味

ソウル日本人学校での研究授業は、キム・スイム先生のご助力で無事終わることができた。その授業を終えた時から、私には「腹をくくった」ことがあった。

「本気で、キム・スイム先生のご期待に添えるよう、がんばる。」李方子妃が再びスポットライトを照らされるように。教師だからできる、教師にしかできないことがあるのではないかと。そう自然と思えるようになった自分が、少しだけ嬉しくもあった。

今まで教師を20年間続けてきて、たくさんの迷惑をかけて来たにもかかわらず、本当に「ひと」に支えられてきた。先輩、同僚、バレーボールの仲間、教え子たち、そして家族。

その中で常に考えさせられたのは、子どもたちに指導してきたように「真面目」「本気」「素直」「一生懸命」に、「私自身は取り組んでいるか。」だった。カリスマ性を持つ教師なら、必要ないのかもしれない。しかし私は話も上手ではなく、不器用で、教師としての力も足りない。私から子どもたちに伝えられることは、自分の生き様を見てもうくらいしかない。しかし、もし自分で役に立つことがあれば、そのときは迷わず主体的に関わろう、と考えるようになった。それが今回の出会いだったのだ。

ソウルでの経験は、おぼろげな自分の生き方の輪郭を、明確にしてくれた。そのきっかけを李方子妃やキム・スイム先生に与えていただいたと思っている。その中で決めたこと。

それは、反日（お断りするが、決して全面的ではない。「過去の歴史」という特定分野に対してという意味だ。）教育を受けてきた韓国の中学生に李方子妃の業績を伝え、このような立派な日本人がいたことを伝えたい。

そして大切なのは「未来志向」の日韓関係をいかにつくるかで、自分自身もそれを実践したいのだという思いを力説する、ということだ。ただ内容が内容だけに、無理にはできない。関わる誰かに迷惑をかけてはならない。そのため、一年目から交流先の開院（ケウォン）中の先生方とは、ずいぶん親交を深めてきた。

韓国の中学校で日本人教師が歴史教育をする。長い間タブーとされてきたことにチャレンジしたい。もしかすると、ほんの少しだけ、歴史が動くかもしれない。

そしてもう一つ。

できればソウル日本人学校の総合学習（ソウルタイム、と呼んでいる。）を、ぜひ慈恵学校の子どもたちとさせていたきたい、ということ。

幸い中学部1年のソウルタイムには、「福祉体験ボランティア学習」が毎年カリキュラムに組み込まれている。今までは旧校舎（ソウル特別市江南区開浦洞）のすぐそばの江南区健康家庭支援センターで行っていた。今年はソウル日本人学校校舎が麻浦区上岩洞デジタルメディアシティに移転したため、訪問先を変えざるを得なかった。李方子妃が、亡き旦那様の意を受けて、自ら資金集めに奔走してできた、必死の思いでつくった学校。その慈恵学校という、日本人が設立した学校に、日本人学校の子どもたちが初めて訪問し、交流させていただく。奇しくも今年度は韓国併合100周年の年だ。韓国併合で、もっとも人生を変えられたといってもいいだろう、李方子妃の建てた学校と、100周年の年に新たに始まる交流。それが実現したらなんと素晴らしいことか。

今、2011年3月の離任を前にこの稿を書いている。

私にとって幸せなことに、二つとも、たくさんの人々の支えのおかげで、実現させていただけた。今、とても充実した気持ちでいっぱいである。すべては、キム・スイム先生に感謝。私は当初キム・スイム先生を通して、李方子妃を学ばせていただいた。しかし、実はキム・スイム先生こそが、歴史そのものだった。

満州事変から日中戦争、第二次大戦、朝鮮戦争の戦火をかいくぐってきた方の生のお話など、日本のどこで聞くことができるだろう。社会科教師の私にとって、いや、一人の人間として、日本人として、キム先生とともに交流実現などの仕事をさせていただいたことを光栄に思う。

さて最後になるが、この稿を読まれている方にぜひお願いしたい。

ぜひ李方子妃、そしてキム・スイム先生のことを世の中に伝えてほしい。それがキム先生のおっしゃる、方子妃の顕彰になるのだ。韓国に住んでいる多くの日本の方が日帝時代のことを中心に、歴史の勉強をされていると聞く。やはり、韓国に住んでいるからには、避けて通れないことがらである。ぜひ「知る」ことから目を背けないでほしい。どのような意見を持つことも民民主義では自由だが、「知らない」ことは時として罪と等しいこともある。日本では韓国併合について、合法か否かの論争があり、それが韓国への偏見の基になることがある。

確かに、当時の国際法上は合法であり、国際的に承認された植民地だったかもしれない。しかし、誤解してはならない。合法であることイコール韓国併合や植民地支配が正当、という論理は成り立たない。当時の帝国主義諸国は、紛争解決手段としての戦争や他民族支配の手法としての植民地を正当視していた。合法というのは、あくまで彼らの申し合わせの表現である国際法に照らし適法ということにすぎない。当時の日本

はその適法の糸をたぐり、国際的干渉を回避しながら「朝鮮の人民の奴隷状態（カイロ宣言）」を作り出したのだ（海野福寿『韓国併合』）。

われわれが考えなければならない「日韓問題」の本質は、併合に至る過程の合法性の如何ではなく、隣国に対する日本と日本人の道義性の問題であると思う。何よりそれをわれわれ大人が、日本の子どもたちに伝えることを怠らないよう、「知った」人間がまず実践していくことが肝要であろう。

もう任期が終わる今だからこそ、自分にこれから何ができるのか、そして今後の日韓関係がどのように推移していくのか、自分も大きく関わっている一員として大いに期待を持ちつづけていたい。

そして、感謝。ありがとう、韓国。ありがとうソウル日本人学校。ありがとう、関わっていただいた全ての方々。